

目的 青春期女性の食味嗜好性が昭和43年(20才)→同53年(30才)の間にどのように変化したかを追跡的に検討した。

方法 演者らは、さきに食品屋味に対する相対的嗜好程度の強弱を知る指標として「嗜好指数」(甘/酸比・甘/塩比・酸/塩比等)の設定を提案した(第20回家政学会発表要旨、岡山大教育学部研究集録30号)。これに基づき、嗜好調査(昭和43年の100名中より昭和53年に70名を追跡)した結果を解析した。

結果 (1) 甘/酸比(酸/甘比)の10年間の変動(χ^2 検定)を見ると、嗜好性における甘味→酸味の多少の移動が認められたが、さらに甘/塩比(塩/甘比)においては、甘味→塩味嗜好の大幅な変化が確認された。(2) この変化を個体別に検討(Wilcoxon検定)すると、甘味好き(甘党)の程度の高かったものほど、この10年間にその嗜好度の低下が著しかった。これに反し、甘味嫌い(酸党・塩党)者にはほとんど変化を認めなかった。

(3) 甘/酸比と甘/塩比との間の相関は、昭和43($r=0.65$)にくらべて昭和53($r=0.77$)ではさらに高まっており、甘味に対して酸味および塩味の後二者が類似の嗜好傾向にあることが、加齢とともに顕著になることが立証できた。(4) 甘味好き群では甘/酸比と甘/塩比との間の相関は両年度を通じて低く、(昭和43: $r=-0.06$, 昭和53: $r=-0.03$)甘味嫌い群ではこの相関は両年度ともきわめて高かった。(昭和43: $r=0.76$, 昭和53: $r=0.83$)

従って、甘味に対して酸味および塩味は、反対味的に類似した意味をもつものと考えられる。